

てんじしょうかい
展示紹介

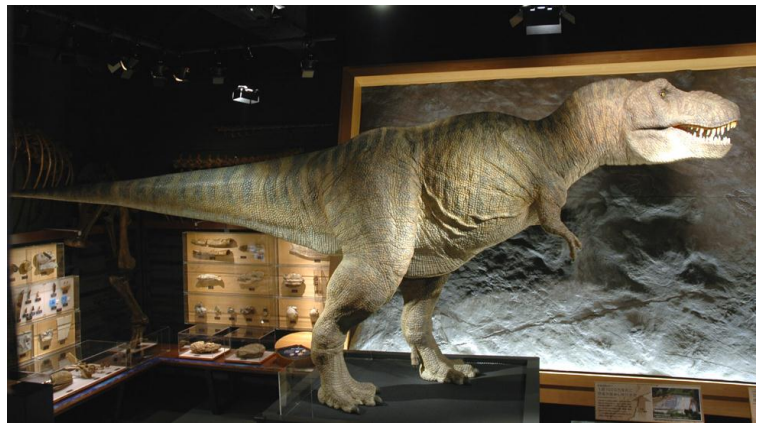
ティラノサウルス

1階「とやま時間のたび」の展示室の奥に大きな恐竜のロボットがいます。目を開いたり閉じたりして、お腹をみるとふくらんだり、へこんだりしてまるで生きているようです。

これはティラノサウルスという今から約7000万年前（中生代白亜紀後期）に北アメリカに生息していた獣脚類（肉食恐竜）です。愛称は平成19年の公募により「ティラちゃん」とつけられました。実際にいたティラノサウルスは全長約12 mにもなりましたが、ティラちゃんは全長約6 mの1/2の模型です。骨の化石から、大型のものは30歳くらいまで生きていたと考えられています。

大きい頭と小さい前足

まず目につくのは大きい頭と、小さい前足です。体全体をみると後足を軸にして、頭と太く長い尾でバランスを取っているようにみえます。獲物を強力なあごで食べるために、口と頭を大きくしました。できるだけ口と頭を大きくしたいために前足をできるだけ小さくして、体の前後のバランスをとっていました。小さな手は寝た姿勢から起きあがるときに使っていたと考える研究者もいます。



正面を向いた目

ティラちゃんを前から見ると、目がほぼ正面を向いていることが分かります。ヒトやライオンのように目が正面を向いていると物体を立体的にみることができ、遠いものと近いものの差を認識することができます。そのような理由からティラノサウルスは、死体だけを食べていたのではなく、動く獲物を襲っていたハンターだと考える説が有力です。

（2010年11月 藤田 将人）